

張婧禕・玉岡賀津雄 (2017). 「中国人日本語学習者によるNV型複合名詞の理解」
『小出記念日本語教育研究会』 25, pp. 35-50.

中国人日本語学習者による NV 型複合名詞の理解

張婧禕 (名古屋大学)・玉岡賀津雄 (名古屋大学)

要 旨

本研究では、名詞+動詞 (NV) 型複合名詞を「名詞+動詞連用形」の構造の「主語+動詞」「目的語+動詞」「補語+動詞」「意味統語無関係」の4つの下位分類に分けて習得状況を測定した。中国人日本語学習者 143 名に対して、NV 型複合名詞、語彙知識、文法知識の3種類のテストを実施した。まず、語彙知識はNV型複合名詞に対して促進的に影響したが、文法知識の影響はみられなかった。そこで、語彙知識別に上位・中位・下位群の3群に分けてNV型複合名詞の正答率を比較した結果、語彙知識が向上すると共に理解が順調に伸びる語と語彙知識がある程度向上しなくては理解が高まらない語があった。さらに、3群の正答率に基づき、40語を分類した結果、習得パターンの異なる4つのクラスタが得られ、中国語の語彙との関係、統語構造に関する知識、語の意味上の不透明性、意味の背景知識の欠如など多様な要因が関与していることが示唆された。

【キーワード】 動詞由来の複合名詞 語彙知識 文法知識 中国人日本語学習者

1. 研究の目的

動詞を含む2つの要素(語)からなる複合語の意味には、二重性がある(石井 2007)。それは、各構成要素の意味により結合する「くみあわせ的な意味」と、各構成要素からは導くことのできない「特殊化・習慣化された意味」あるいは「ひとまとまり性」である。前者の「くみあわせ的な意味」については、「食べ物」のように、各構成要素の「食べる」と「もの」が結合して、「食べる物」という個々の要素の意味から直接概念が導き出せる語である。それに対し、後者の「特殊化・習慣化された意味」は、結合する要素の組み合わせから得られる意味ではなく、複合語全体が一つの単語として意味をなすものである。たとえば、「卵焼き」は、統語的には、目的語の「卵」と動詞の「焼く」で、「卵を焼く(こと)」という述部構成になると考えられる。しかし、実際の意味は、卵を焼きながら巻いて筒状にした日本料理を指す。同様に、「山登り」は、名詞句の「山に」と動詞の「登る」を組み合わせた単純な動詞句としての解釈ではなく、「山に登るという活動やイベント」を意味する。また、「金持ち」は、「お金を持つ

ている(こと)」ではなく、お金をたくさん持っている富裕な人を指す。さらに、「手続き」は、「手」と「続く」が結合して、物事を行う手順という意味になる。このような「特殊化・習慣化された意味」の複合語は、各構成要素の組み合わせから意味を導くことができないので、個々の複合語ごとに意味を覚えていくしかなく、日本語学習者にとって、意味を正しく理解するのは難しいと予想される。

佐尾 (2001) は『語彙の研究と教育 (下)』(国立国語研究所 1987) による統語構造の分類を参照したうえで、対象となる複合名詞の統語構造を分類し、旧日本語能力試験出題基準 (文字・語彙) 1 級語彙の複合名詞における各語の統語構造を持つものを集計した。その結果、実際に旧日本語能力試験 1 級語彙に載せられた 8,009 語のうち、複合名詞は 358 語 (4.5%) であった。これらの 358 語の複合名詞のうち、動詞を含まない N(名詞)+N 型の複合名詞は、119 語 (33.2%) であった。一方、動詞を含む N+V(動詞)型複合名詞は 83 語であり、複合名詞全体の 23.2%を占めた。また、V+N 型複合名詞は 56 語 (15.6%) で、V+V 型複合名詞は 63 語 (17.6%) であった。以上のデータから、動詞を含む複合名詞のうち、名詞を動詞の連用形で結合する N+V 型複合名詞が最も多いことが分かった。しかし、これらの N+V 型 (以下、NV 型) 複合名詞は、述部構造から意味を推測することができるものの、名詞と動詞の結合によって新たな意味が生み出されるような「ひとまとまり性」の条件では、むしろ統語的な解釈が可能であることが理解を阻害することさえある。

国際交流基金 (2013) の『海外の日本語教育の現状—2012 年度日本語教育機関調査より』によると、日本語を第 2 言語として学んでいる学習者は 400 万人に上り、その中で中国人が多数を占めている。そのため、中国人日本語学習者の習得、教授法、カリキュラムの開発は、日本語教育において主要な課題である。また、日中両言語で漢字表記を共有するものの、統語的な面では大きな違いがある。そこで、本研究では、最も学習者数の多い中国人日本語学習者を対象に、動詞を含む NV 型複合名詞の理解に焦点を当て、NV 型複合名詞の理解テストを、日本語の語彙および文法知識のテストと併せて実施した。これら 3 種類のテストについて、第 1 に、語彙と文法知識がどのように複合名詞の理解に貢献しているか、第 2 に、中国人日本語学習者における NV 型複合名詞ごとの難易度および正答以外の選択肢の選択者数も考慮に入れ、検討することを目的とする。

2. 研究方法

2. 1. 調査実施対象

調査実施対象は、中国の大学で日本語を専攻とする 2 年生 (30 名)、3 年生 (62 名)、4 年生 (42 名) および大学院生 (9 名)、計 143 名である。平均年齢は 24 歳 11 ヶ月、標準偏差は 18 ヶ月であった。最年長は 25 歳 5 ヶ月で、最年少は 18 歳 10 ヶ月であつ

た。以下の3つのテストの問題項目をすべてランダムに配置して、一つのテストとして全員に実施した。

2. 2. 調査実施内容

2. 2. 1. NV型複合名詞の刺激語の選定とテスト

刺激語を選ぶために、まず8,009語が掲載された旧日本語能力試験（1級～4級）の語彙出題基準から、すべてのNV型複合名詞を候補語として抽出した。候補語からNV型複合名詞をさらに4つに下位分類した。沖（1983）は、複合語について各構成要素間の意味関係に基づく意味的分類および統語関係に基づく構造的な分類を行っている。これを参考にして、本研究では、NV型複合名詞を、「主語と動詞」（「ガ」格を取る構造）、「目的語と動詞」（「ヲ」格を取る構造）、「補語と動詞」（「ガ」か「ヲ」以外の格を取る構造）、さらに「意味・統語無関係」の4つに分類した。これらの下位分類は、本研究では、各10点満点のテストとして構成したが、その得点は表1に報告したとおりである。なお、NV型複合名詞の問題は、すべて四者択一の形式であり、配点は1問につき1点（満点40点）である。たとえば、「見知らぬ男から（ ）に奇妙な電話がかかってきた。」という文の内容にふさわしい語を4つの選択肢、「夜遅れ」、「夜更かし」、「夜更け」、「夜深く」から1つだけ選ばせる問題である。ここでは、「夜更け」が正答となる。

2. 2. 2. 日本語の語彙知識テスト

宮岡・玉岡・酒井（2011）の語彙知識テストを使用した。このテストは、結果の得点化において、2つの観点から分類できるように作成されている。まず、語種の観点からは、和語、漢語、外来語、機能語の4種類に分類でき、それぞれ12問の合計48問で構成されている。採点においては、各問1点で48点満点となる。また、品詞の観点からも同様の構成になっており、名詞、形容詞、動詞、機能語の4種類に分類でき、語種と同様に、それぞれ12問の合計48問で、各問1点の48点満点である。機能語は、語種と品詞の両観点で共通である。なお、機能語を除いて、語種および品詞の各下位分類の難易度は旧日本語能力試験（国際交流基金・日本国際教育協会 2002）の出題基準に基づいて統制されている。問題は、四者択一で、たとえば、「彼女はどんなに大変なときでも、（ ）ひとつ言わずに病人の世話をしている。」という文の括弧内に入れるのに適切な単語を、「文句」「苦難」「不評」「愚痴」の4つの中から1つ選ぶという形式である。ここでは「愚痴」が正答となる。

2. 2. 3. 日本語の文法知識テスト

宮岡・玉岡・酒井（2014）を基にして、早川・玉岡（2015）が改訂した文法テストを用いた。この文法知識のテストは、四者択一で、「形態素変化」、「局所依存」、「構造の複雑性」の3つの下位分類を持ち、各分類につき12問から構成されている。1問1点で、満点36点である。たとえば、「私はあなたのわがままにつきあっているほど

()。』という文の内容にふさわしい単語を4つの選択肢、「ひまにない」、「ひまなじゃない」、「ひまじゃない」、「ひまくない」から1つだけ選ぶ問題である。ここでは、「ひまじゃない」が正答である。

3. 分析方法および結果

3. 1. 実施したテストの記述統計の結果および信頼度係数

中国人日本語学習者 143 名に実施した NV 型複合名詞、語彙知識、文法知識の3種類のテストの満点、平均、標準偏差、最高点、最低点、クロンバックの信頼度係数¹⁾は表1に示した通りである。

表1 3種類のテストおよび下位分類の記述統計とクロンバックの信頼度係数(α)

下位分類	満点	<i>M</i>	<i>SD</i>	Max	Min	α
NV型複合名詞知識	40	20.66	6.07	36	8	
主語+動詞	10	5.37	2.18	10	1	
目的語+動詞	10	4.61	1.68	9	1	0.79
補語+動詞	10	4.85	1.90	10	1	
意味・統語無関係	10	5.84	2.01	10	1	
語彙知識	48	26.78	8.66	46	7	
漢語	12	7.97	2.39	12	1	
和語	12	5.57	2.72	12	0	0.89
外来語	12	7.26	2.45	12	2	
機能語	12	5.71	2.63	11	0	
文法知識	36	19.57	6.20	34	8	
形態素変化	12	6.89	2.55	12	0	
局所依存	12	6.60	2.06	12	1	0.82
構造の複雑性	12	6.08	2.58	12	1	

注: $N=143$. M は平均、 SD は標準偏差、Max は最高得点、Min は最低得点、 α はクロンバックの信頼度係数を示す。

NV 型複合名詞の理解テストは、40 点満点で、最高点の 36 点から最低点の 8 点までの範囲に分布し、平均が 20.66 点、標準偏差が 6.07 点であった。4 つの下位分類の平均は、4.61 点から 5.84 点の範囲で、類似していた。「腰掛け」「湯飲み」など「目的語+動詞」の複合名詞の平均は 4.61 点で、標準偏差は 1.68 点であった。「腹立ち」「人通り」など「主語+動詞」の複合名詞の平均は 5.37 点、標準偏差は 2.18 点であった。「前売り」「首飾り」など「補語+動詞」の複合名詞の平均は 4.85 点、標準偏差は 1.90 点であった。「下調べ」「左利き」など「意味・統語無関係」の複合名詞の平均は 5.84 点、標準偏差は 2.01 点であった。日本語能力を測定するために実施した 2 つのテスト

については、語彙知識テストが、全問題の平均が 26.78 点、標準偏差が 8.66 点であった。文法知識テストは、全問題の平均が 19.57 点、標準偏差は 6.20 点であった。3つのテストのクロンバック信頼度係数は、表 1 に示した。具体的には、NV 型複合名詞の理解テストは 0.79、語彙知識テストは 0.89、文法知識テストは 0.82、いずれも非常に高かった。

3. 2. NV 型複合名詞の理解テストを予測した重回帰分析の結果

NV 型複合名詞、語彙知識、文法知識のピアソンの積率相関係数²⁾は、語彙知識と文法知識が $r=.76$ ($p<.001$) で、語彙知識と NV 型複合名詞が $r=.79$ ($p<.001$) で、文法知識と NV 型複合名詞が $r=.64$ ($p<.001$) であり、これらの相関係数は有意であった。さらに、語彙知識と文法知識が NV 型複合名詞の理解にどう影響しているかを検討するために、NV 型複合名詞を語彙知識と文法知識で予測する重回帰分析で予測した ($R^2=.626$; R^2 は決定係数)。その結果、語彙知識は有意な正の予測変数 ($\beta=.710$, $p<.001$; β は標準偏回帰係数) となったが、文法知識は有意な予測変数とはならなかった ($\beta=.103$, ns)。

この結果をみると、中国人日本語学習者による NV 型複合名詞の理解においては、語彙知識が NV 型複合名詞の理解を促進しており、NV 型複合名詞は、基本的には語彙項目として習得される傾向があることを示唆していると言えよう。実際、先行研究 (奥津 1975、玉村 1988、瀬田 2006) でも、NV 型複合名詞は統語構造から意味を推測しようとする、意味が曖昧になってしまうことが指摘されており、文法知識が有意に NV 型複合名詞の理解に貢献しなかったことを裏付けている。ここで、語彙知識が NV 型複合名詞の理解に大きく貢献することが分かったので、以下は語彙知識の観点からさらに検討を進めていく。

3. 3. 語彙知識テストの得点による群分けと NV 型複合名詞の習得の違い

中国人日本語学習者 143 名の語彙知識テストの得点は、図 1 のような分布であった。語彙知識の全被験者 143 名の平均 26.78 点を基準に、ほぼ同人数になるように上位・中位・下位群の 3 群に分けた。その結果、図 1 に示したように、上位群は 33 点以上の 49 名、中位群は 22 から 32 点までの 47 名、下位群は 7 から 21 点までの 47 名とした。

各 NV 型複合名詞の 4 つの下位分類の理解が語彙知識によってどう異なるかを検討するため、語彙知識の上位・中位・下位の 3 群について一元配置の分散分析³⁾を行った。その結果、すべての下位分類の NV 複合名詞で 3 群の主効果が有意であった。つまり、語彙知識の違いが一貫して NV 型複合名詞の下位分類の得点に影響したことを示している。さらに、各下位分類における 3 つの群間の違いについては、シェフェの多重比較⁴⁾を用いて検討した。これらの結果は、図 2 に示した通りである。

「湯飲み」、「橋渡し」などの「目的語+動詞」の得点における語彙知識で分けた 3 群の主効果は有意であり [$F(2, 140)=10.44$, $p<.001$, $\eta_p^2=0.13$]、多重比較の結果、下位と中位には有意な違いはなく、上位群が他の 2 群と比べて有意に得点が高くなった。

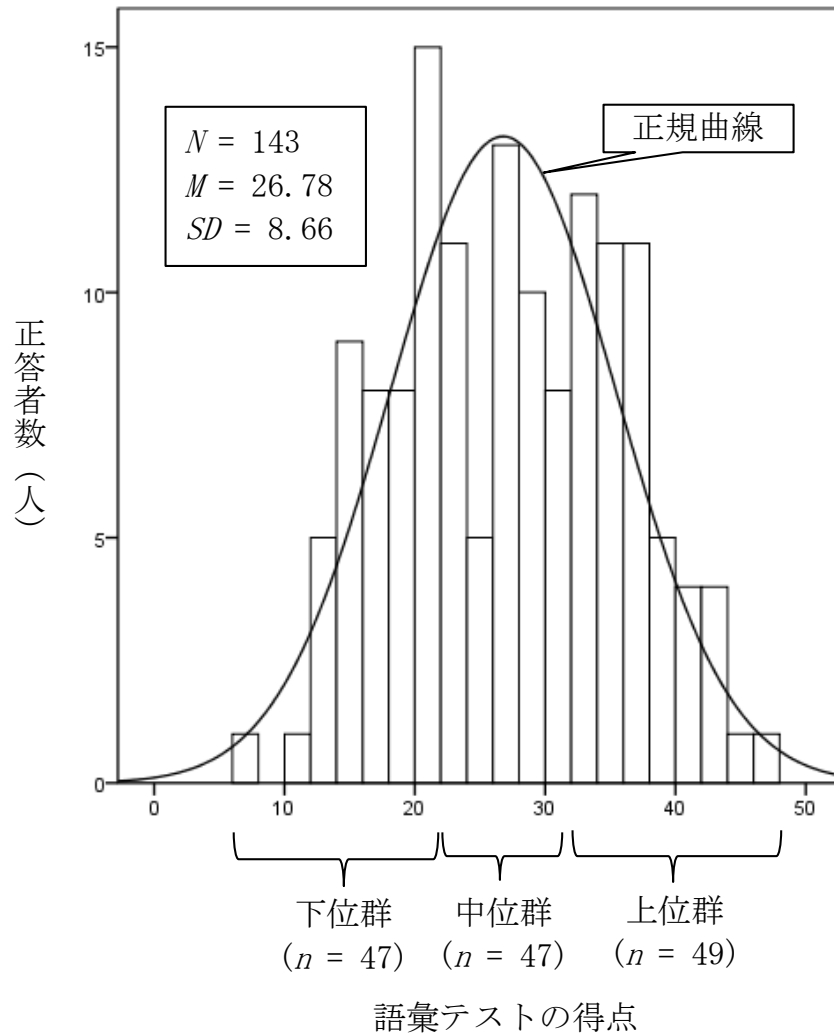


図1 語彙知識テストの得点による上位・中位・下位群の分類

注: N は全体、 n は各群の被験者数、 M は平均、 SD は標準偏差を示す。

「前売り」、「首飾り」などの「補語+動詞」の複合名詞の理解もそれと同じ傾向がみられ、3群の主効果は有意であり [$F(2, 140)=41.93, p<.001, \eta_p^2=0.38$]、多重比較の結果は「下位=中位<上位」となった。つまり、この2種類のNV型複合名詞については、学習者の語彙知識がある程度高くなると理解が進まないようである。

一方、「手遅れ」、「人通り」などの「主語+動詞」と「顔付き」、「値打ち」などの「意味・統語無関係」の両方のNV複合名詞の理解について、3群の主効果が有意であった（「主語+動詞」は [$F(2, 140)=67.31, p<.001, \eta_p^2=0.49$]、「意味・統語無関係」は [$F(2, 140)=46.28, p<.001, \eta_p^2=0.40$]）。シェフェの多重比較の結果、それぞれの群に有意な違いがあり、3群間の得点は、「下位<中位<上位」となった。つまり、これらの2種類のNV型複合名詞については、下位から上位群に向かって学習者の語彙知識が伸びると共に、NV複合名詞の理解も高くなっていく傾向がみられた。

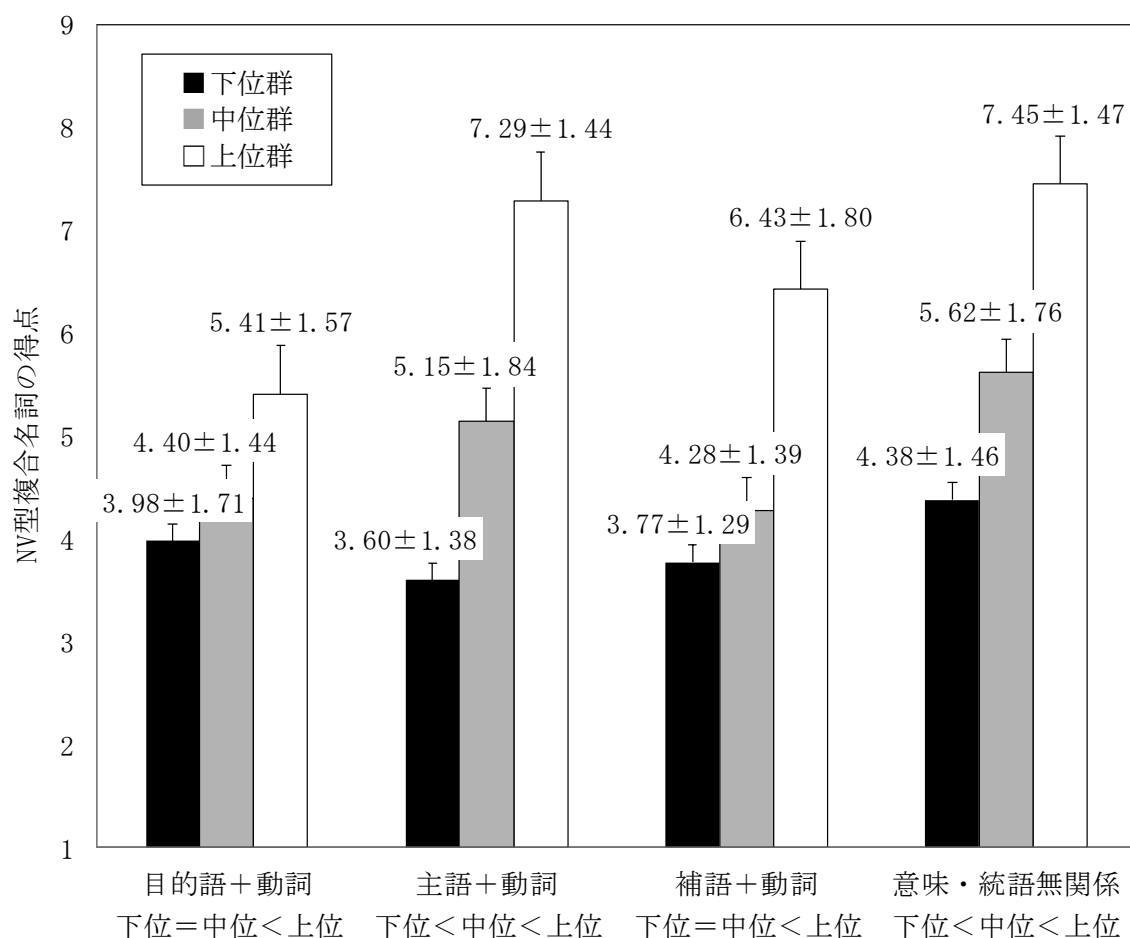


図2 3群分けの各NV型複合名詞の下位分類による分散分析と多重比較の結果
注: 図の数値は平均(M)、±の後の数値は標準偏差(SD)を示す。

3. 4. 項目困難度と実質選択肢数の計算

40語のNV型複合名詞の理解においては、四者択一の問題形式をとった。つまり、1つの正答に対して、3つの誤りの錯乱肢を作成した。この条件において、学習者が何を手掛かりにNV型複合名詞の正答を選んでいるのかを考察するために、項目応答理論 (Item Response Theory) に基づいて開発された分析ソフト TDAP ver. 2 (Test Data Analysis Program; 大友・中村 2002) を用いて、各NV型複合名詞の項目難易度と実質選択肢効果を算出した。項目困難度とはNV型複合名詞の質問項目がどれくらい理解されているかを示す指標である。0から1までの数値をとり、0であれば、該当項目を理解するのが困難であることを示し、項目困難度の数値が1であれば、該当NV型複合名詞項目を理解するのが容易であることを示す。この値は、実質的には正答率と同じである。

また、実質選択肢数とは、錯乱肢が正答を選ぶことをどのくらい難しくしているかを示す指標である。1から選択肢の数までの数値をとり、本研究では四者択一の問題形式であるため、1から4までの値となる。実質選択肢数の数値が1であれば、全員

が正答したことになる。4であれば、1つの正答に対して3つの錯乱肢を含む4つの選択肢がほぼ同数の回答者に選ばれたことを示す。基本的に、正答率が低くなると、項目困難度も0に近づき、正答以外の選択肢を選ぶ確率も高くなるので、実質選択肢数も高くなる傾向がある。本研究では、この予想の通り、全NV複合名詞 ($n=40$) のピアソンの積率相関係数は、極めて高い逆相関を示した [$r=-.92(p<.001)$]。項目困難度と実質選択肢数の指標は、NV複合名詞の特性を考察する上で、有効な指標と思われるので、正答者数と共に、表2に記載した。

3. 5. NV型複合名詞の得点に基づく階層的クラスタ分析の結果

日本語学習者にとって、どのような特徴を持つNV型複合名詞が理解し易いかあるいは理解し難いかを総括的に考察するために、階層的クラスタ分析を行った。語彙力に基づいた3群の被験者によるNV型複合名詞の平均正答率を3つの独立変数として、階層的クラスタ分析を行った。クラスタ間の距離はウォード法、40語の複合名詞の距離は平方ユークリッド距離を使った。25ポイントスケールの6ポイントを基準として、4つのクラスタに分類した。さらに、正準判別分析を用いて、この4つのグループの判別の正しさを交差妥当化で検証した。判別の中率は97.5%という高い数値であり、階層的クラスタ分析で得られたこの4分類が非常に正しく分類されていたことを示している。クラスタ分析の結果は表2に示した。中国人日本語学習者全員の平均正答率に基づいて、クラスタ間の平均を比較すると、クラスタⅠが76.66%、クラスタⅡが59.93%、クラスタⅢが46.71%、クラスタⅣが32.23%となり、正答率に大きな違いがみられた。以下に、各クラスタに含まれるNV型複合名詞の特徴を捉え、表2の選択肢の効果（実質選択肢数）と絡めて、習得への示唆について議論する。

3. 5. 1. クラスタⅠの分析結果

クラスタⅠ ($n=76.66\%$) は、語彙知識別で分けた上位・中位・下位群を通じて、正答率が高い項目群である。このクラスタに含まれるNV型複合名詞の項目困難度はいずれも0.66以上と高い数値であり（正答率が高い）、実質選択肢数は1.70から2.93までの値で、小さかった。このクラスタには8語が含まれ、複数のタイプのNV型複合名詞が含まれている。具体的には、「補語+動詞」タイプの「首飾り」と「日焼け」が2語、「目的語+動詞」のタイプの「歯磨き」と「嘘つき」が2語と「意味・統語無関係」タイプの「顔付き」、「手続き」、「夕暮れ」、「左利き」の4語である。構成要素の意味的關係からも統語的關係からも全体の意味が成り立たない「意味・統語無関係」タイプのNV型複合名詞が半分を占めた。これらの語は、統語的または各構成要素の意味的關係からでは理解が難しいと考えられる。

一方、このクラスタには、「手続き」、「首飾り」のようなNV型複合名詞も含まれる。これらの語は中国語の「手续 (shǒu xù)」「首飾 (shǒu shì)」と書記上の類似性があり、意味も同じである。各調査項目の選択状況を調べたところ、143名の学習者の

表2 クラスタ分析結果および各語の正答者数、正答率、項目困難度と実質選択肢数

複合名詞 (n=40)	下位 分類	上位群 (n=49)		中位群 (n=47)		下位群 (n=47)		項目 困難度	実質 選択肢数	
		正答者数	%	正答者数	%	正答者数	%			
クラスタ I	首飾り	C+V	41	84	39	83	36	77	0.81	1.99
	日焼け	C+V	41	84	34	72	25	53	0.69	2.47
	歯磨き	O+V	37	76	42	89	36	77	0.80	1.91
	嘘つき	O+V	42	86	41	87	26	55	0.76	2.09
	顔付き	N	43	88	35	74	34	72	0.78	2.03
	手続き	N	48	98	40	85	36	77	0.87	1.70
	夕暮れ	N	35	71	36	77	35	74	0.74	2.07
	左利き	N	43	88	34	72	18	38	0.66	2.63
クラスタ II	前売り	C+V	41	84	24	51	27	57	0.64	2.59
	目付き	N	39	80	24	51	27	57	0.63	2.86
	下調べ	N	31	63	23	49	25	53	0.55	3.20
	欲張り	O+V	35	71	21	45	19	40	0.52	3.08
	跡継ぎ	O+V	38	78	19	40	19	40	0.53	3.10
	橋渡し	O+V	35	71	20	43	25	53	0.56	2.76
	手遅れ	S+V	41	84	29	62	31	66	0.71	2.47
	人通り	S+V	45	92	26	55	23	49	0.73	2.41
クラスタ III	人込み	S+V	32	65	23	49	29	62	0.59	2.85
	心当たり	S+V	34	69	23	49	19	40	0.53	3.05
	田植え	C+V	31	63	19	40	8	17	0.41	3.32
	日帰り	C+V	39	80	24	51	17	36	0.56	3.08
	前置き	N	34	69	14	30	6	13	0.38	3.27
	値打ち	N	35	71	13	28	5	11	0.37	3.34
	戸惑い	N	33	67	21	45	4	9	0.41	3.65
	勘違い	S+V	29	59	20	43	11	23	0.42	3.50
クラスタ IV	仲直り	S+V	38	78	16	34	13	28	0.47	3.41
	日差し	S+V	41	84	28	60	8	17	0.54	2.91
	夜明け	S+V	42	86	27	57	17	36	0.59	2.99
	腹立ち	S+V	39	80	24	51	13	28	0.53	3.26
	手掛かり	N	24	49	24	51	16	34	0.45	3.57
	夜更け	S+V	16	33	16	34	6	13	0.27	3.90
	後回し	C+V	25	51	12	26	13	28	0.35	3.85
	裏返し	C+V	22	45	20	43	15	32	0.40	3.66
クラスタ IV	宙返り	C+V	23	47	11	23	9	19	0.30	3.97
	心掛け	C+V	26	53	10	21	18	38	0.38	3.25
	区切り	C+V	26	53	8	17	9	19	0.30	3.85
	湯飲み	O+V	12	24	7	15	3	6	0.15	3.83
	塵取り	O+V	16	33	18	38	15	32	0.34	3.12
	梅干し	O+V	18	37	12	26	20	43	0.35	2.69
クラスタ IV	荷作り	O+V	12	24	16	34	17	36	0.31	3.51
	腰掛け	O+V	20	41	11	23	7	15	0.27	3.68

注：「S+V」は「主語+動詞」、「O+V」は「目的語+動詞」、「C+V」は「補語+動詞」、「N」は「意味・統語無関係」を表す。

うち、「携帯電話を新しく買うとき、何か（ ）が必要ですか？」という問題文に対しては、124名が「手続き」（86.71%）を正しく選択した。また、「彼女の胸元にはダイヤの（ ）が輝いていた。」という問題文については、116名が「首飾り」（81.12%）を正しく選択した。このような高い正答率からみると、これらの複合語は、中国語の漢字の意味を手掛かりに、容易に理解できたと思われる。このクラスターの語の理解における母語知識（漢字知識）からの強い正の転移により、他の錯乱肢を選ぶことはなかったと思われる。したがって、このクラスターは「母語の語彙知識を有効に利用できる」NV型複合名詞だと言えよう。

3. 5. 2. クラスターⅡの分析結果

クラスターⅡ（ $M=59.93\%$ ）はクラスターⅠよりNV型複合名詞の平均正答率がやや低かった。語彙知識の上位群の正答率が高いのに対して、中位・下位群の正答率は同じ程度で、40%から60%の範囲にとどまっている。このクラスターに含まれるNV型複合名詞の項目困難度は0.52から0.73までの範囲であり、実質選択肢数は2.41から3.20までの値であった。これらのNV型複合名詞のうち、「補語+動詞」タイプが「前売り」の1語、「意味・統語無関係」タイプが「目付き」、「下調べ」の2語、「目的語+動詞」タイプが「欲張り」、「跡継ぎ」、「橋渡し」の3語、「主語+動詞」タイプが「手遅れ」、「人通り」、「人込み」、「心当たり」の4語であった。このクラスターの複合名詞は、「人通り」（72.73%）は、「通る」が自動詞で「人が通る」という「主語+動詞」、「橋渡し」（55.94%）は「渡す」が他動詞で「橋を渡す」という「目的語+動詞」、「前売り」（64.34%）は、「前に売る」で「補語+動詞」の関係となり、動詞との関係から推測がし易い複合名詞が多い。たとえば、「そのプログラムはとても人気で、（ ）はあつという間になくなってしまった。」という調査項目に対して、92名が正答の「前売り」（64.34%）を選んだ。錯乱肢の「前買い」を選んだ学習者はわずか3名（2.10%）しかいなかった。「前」に「売る」か「買う」かは、いずれの選択も可能である。そのため、この語が「前に売る」を基本としていることを知っていなくてはならず、一つの語彙として習得されていることを裏付けている。実際、語彙知識の中位・下位群の学習者の正答率は低く、上位群になってはじめて80%を越えている。中位・下位群は、これらのNV型複合名詞の意味を見出だせるほどの語彙知識が十分でなく、正しく理解できなかったと推察される。このクラスターの語彙を理解するためには、語彙知識が上位群にならなくては理解が伸びないので、「語彙量がある程度豊富になってから理解できるようになる」NV型複合名詞と考えられよう。

3. 5. 3. クラスターⅢの分析結果

クラスターⅢ（ $M=46.71\%$ ）は、平均正答率が最も低いクラスターⅣより、やや高いくらいのNV型複合名詞であった。語彙知識が高くなるにつれ、正答率も上がっていくものの、下位群の正答率が低いのが特徴的である。語彙知識の下位群では、正答率が3割

に満たないものが10語中8語もあった。このクラスタに含まれるNV型複合名詞の項目困難度は0.37から0.59までの範囲であり、実質選択肢数は2.91から3.65までの値であった。これら10語のNV型複合名詞のうち、「補語+動詞」タイプが「田植え」、「日帰り」の2語、「意味・統語無関係」タイプが「前置き」、「値打ち」、「戸惑い」の3語と「主語+動詞」タイプが「勘違い」、「仲直り」、「日差し」、「夜明け」、「腹立ち」の5語であった。全体的に正答率が低い群であり、語彙知識で分けた上位・中位・下位の3群の間の正答率にも大きな違いがみられた。

このクラスタの各項目における構成要素の語をみると、「値打ち」、「前置き」などの語の後部要素である「打つ」、「置く」などの動詞では、初期段階の日本語学習者にとって、「人を打つ」、「物を置く」などの基本義から習うのが一般的である。しかし、これらの複合名詞は、独自の意味派生が生じている。たとえば、「値打ち」であれば、「値段を打つこと」と解釈できるが、「値段を決めること」の意味になる。「前置き」は、「前に置く」という意味ではなく、「本題に入る前に話す内容」を意味する。さらに、「戸惑い」などの語の前部要素である「戸」自体は単純な名詞であるが、後部要素である動詞と結合することで、前部要素の名詞の基本義が希薄になる「戸惑い」であれば、「入る家や部屋がわからなくて困る」ことも意味するが、これが転じて、「手段や方法がわからなくてどうしたらよいか迷うこと」を意味し、「戸惑いを感じる」といった表現で使われるようになった。「戸」の基本的な意味はなくなっている。これらの意味が基本義から転じて抽象的な意味を示すようになった複合語は、学習者にとって理解し難いと思われる。

これらの複合語について、錯乱肢の選択者数を調べてみると、「値打ち」（実質選択肢数=3.34）は「人の（ ）をお金や物質的なもので判断してはいけない。」という調査項目の正答であるが、それを選択した学習者が53名（37.06%）で、多くの学習者（計59名）は動詞の意味を間違えて錯乱肢の「値引き」（41.26%）を選んでいる。「前置き」（実質選択肢数=3.27）では、「あの人はいつも本題に入る前に、（ ）が長い。」という調査項目に相応しい複合名詞（37.76%）であるが、143名の学習者のうち、47名が錯乱肢の「前引き」（32.87%）を選択し、38名が錯乱肢の「話引き」（26.57%）を選択している。「戸惑い」（実質選択肢数=3.65）は、「営業方針の大転換に対して、社員たちは（ ）を隠せない。」という調査項目の正答（全正答者数は58名、全員の正答率は40.56%）であるが、およそ3分の1の学習者（全正答者数は42名、全員の正答率は29.37%）は錯乱肢の「心惑い」を選んで誤答した。「田植え」（実質選択肢数=3.32）は、「（ ）から収穫までの一貫した作業を通じて、お米作りの大変さを実感する。」という文の正答（全正答者数は58名、全員の正答率は40.56%）であるが、間違えて錯乱肢の「手植え」を誤答した学習者も少なくなかった（誤答者数は52名、誤答率は36.36%）。学習者にとって、語に対して深い知識を持つ

ていなくても、文字通りで「(自分の) 手で植える (こと)」という意味から推測し、「手植え」を選んだのではないかと思われる。

錯乱肢の学習者の選択者数をみると、各構成要素の語彙および結合の結果としての複合名詞の意味に関する知識を持たなければ、これらの語の理解は難しいと考えられる。語彙知識に基づく群分けによる正答率をみると、基本義しか習っていないような初級学習者（語彙知識の下位群）は語彙知識が豊かではなく、複合名詞の全体としての意味が理解し難かった様子が伺える。一方、語彙知識別に分けた中位群から上位群へと理解度が上がるにつれて、語彙に関する知識が豊富になるにつれて、このクラスタⅢの複合名詞の理解も促進されたのではなかろうか。語彙知識の豊かさが、複合名詞の理解を促進すると思われるため、クラスタⅢは「語彙知識の向上と共に理解も促進される」NV型複合名詞と言えよう。

3. 5. 4. クラスタⅣの分析結果

クラスタⅣは、クラスタⅠと対照的に、全体的に正答率が低かった ($M=32.23\%$)。NV型複合名詞の正答率が全体的に見ると極めて正答率が低いクラスタである。このクラスタは、上位・中位・下位群と語彙知識が向上しても、NV型複合名詞の理解が向上しない傾向が見られた。このクラスタに含まれるNV型複合名詞の項目困難度は0.15から0.45までの範囲で低かった。また、実質選択肢数も2.69から3.97までの範囲であり、錯乱肢の効果が最高値の4に近く、正答以外の3つの選択肢もそれぞれ高い頻度で選ばれていたことを示している。このクラスタに含まれる12語のNV型複合名詞には、「意味・統語無関係」のタイプが「手掛かり」の1語、「主語+動詞」のタイプが「夜更け」の1語、「補語+動詞」のタイプが「後回し」、「裏返し」、「宙返し」、「心掛け」、「区切り」の5語と「目的語+動詞」のタイプが「湯飲み」、「物入れ」、「梅干し」、「荷作り」、「腰掛け」の5語であった。

このクラスタにおいては、本研究で設けたNV型複合名詞の4タイプがすべて含まれていた。クラスタⅣの語彙項目をみると、「補語+動詞」タイプの語は5語(41.67%)があり、ほぼ半分に近く占めていた。たとえば、このタイプのNV型複合名詞には、「裏返し」や「区切り」がある。これらを動詞句として理解するには、「裏に返す」の「に」や「区で切る」の「で」など、「を」以外の格助詞を付けて理解しなくてはならない。これらの項目の実質選択肢数は高く、ランダムに近い。こうした格助詞の選定およびその後の理解は学習者にとって難しく、複合名詞の理解をより困難にしているため、正答率が低くなったのではないかと思われる。また、このクラスタでは、すでに述べたように、NV型複合名詞は、統語構造が同じであっても、構成要素の名詞と動詞の組み合わせによる意味形成後に曖昧さが残り、新たな意味が付与される(奥津 1975、玉村 1988、スバンディ 2002、瀬田 2006)ものも多い。たとえば、このクラスタの「湯飲み」、「塵取り」、「腰掛け」のような「目的語+動詞」タイプのNV型複合名詞は、「湯

を飲む」、「塵を取る」、「腰を掛ける」と動詞句で解釈しようとする意味が分かりにくい。実際、「腰掛け」(15.38%)の例であれば、「(腰を掛けるもの) 道具」なのか、「(腰を掛けること) 行為」なのか、意味的な曖昧さがある。これらの語に付与した新たな意味である道具について、学習者は判断がつかない。そのほか、このクラスタには「心掛け」などのような複合名詞が含まれた。実際の質問文をみると、「清潔な作業場を保つために、一人ひとりの()が大切である。」という質問文について、143名のうち54名の学習者が正答の「心掛け」(37.76%)を選んだ。しかし、51名の学習者が、自動詞の「掛かる」を含む錯乱肢の「心掛かり」(35.66%)を選んでいる。以上のことから、このクラスタは「格助詞の選択、自他対応の動詞を含み、かつ指示するものが特定し難い」NV型複合名詞にまとめられよう。

4. まとめ

本研究では、143名の中国人日本語学習者を対象に3種類のテストを実施し、語彙知識と統語知識の観点からNV型複合名詞の理解を検討した。本研究の考察結果は以下の3点にまとめられる。

第1に、重回帰分析の結果では、NV型複合名詞の理解には、語彙知識が強く貢献しており、統語知識はほとんど貢献していなかった。名詞と動詞の組み合わせによって統語構造が作れるものの、動詞句から意味を理解するアプローチは、むしろNV型複合名詞の全体の意味の理解を阻害する傾向があるのではないと思われる。ただし、本研究の文法知識テストは、「形態素変化」、「局所依存」、「構造的複雑性」の3つを下位分類とするテストであり、NV型複合名詞に含まれる名詞と動詞からなる動詞句のようなテンスもアスペクトも持たないシンプルな統語関係の構築には、こうした統語知識が影響しない可能性もある。この点については、今後の研究課題である。

第2に、NV型複合名詞の正答率を比較すると、NV型複合名詞の習得状況について、2つのパターンがみられた。一つは、「目的語+動詞」と「補語+動詞」のタイプである。このパターンのNV型複合名詞は、学習者にとっては、語彙知識がある程度向上しなくてはNV型複合名詞の理解が高まらないようである。これらは、語彙知識の下位・中位群の学習者では習得が進まず、語彙知識が豊富な上位群になってはじめて習得される傾向を示した。もう一つは、「主語+動詞」と「意味・統語無関係」のタイプのNV型複合名詞である。このパターンのNV型複合名詞は、語彙知識が向上すると共に、理解が伸び、順次習得される傾向を示した。

第3に、語彙知識に基づいて分けた上位・中位・下位群のNV型複合名詞の正答率によって、クラスタ分析で40語を分類した。その結果、4つのクラスタに分けられた。まず、クラスタIが「母語の語彙知識を有効に利用できる」NV型複合名詞であった。これらの語は、中国人日本語学習者にとって理解されやすく、中国語の漢字を手掛か

りに、容易に理解できる。クラスタⅡは「語彙量がある程度豊富になってから理解できるようにする」NV型複合名詞で、語彙知識が下位・中位群の学習者は同じ程度の低めの正答率に留まっていた。語彙知識がある程度豊かになる上位群になってから、理解が促進される語である。クラスタⅢは「語彙知識の向上と共に理解も促進される」NV型複合動詞であった。下位、中位、上位と語彙知識が向上すると共に、これらの語の理解も進んでいく。最後に、クラスタⅣは「格助詞の選択、自他対応の動詞を含み、かつ指示するものが特定し難い」NV型複合名詞であった。これらの複合名詞は、動詞の項が必ずしも対格を取らず、また自他動詞の曖昧さも伴って、全体としての意味を限定し難い語である。

最後に、これらの4つのクラスタは、統語構造によるNV型複合名詞の4つの下位分類とは必ずしも一致しなかった。つまり、これらのクラスタには、「ガ」格を取る「主語と動詞」、「ヲ」格を取る「目的語と動詞」、「ガ」か「ヲ」格以外の格を取る「補語と動詞」、「意味・統語無関係」の4つの下位分類のNV型複合名詞が混在していた。NV型複合名詞は統語的な構造を持つが、ひとまとまりとしての意味上の不透明さ生じるために理解が難しい(たとえば、奥津 1975、玉村 1988、スバンデイ 2002、瀬田 2006、石井 2007)。しかし、これら4つのクラスタをみると、中国人日本語学習者にとって、この種の複合名詞の理解が難しいのは、中国語の語彙との関係、統語構造に関する知識、語全体の意味形成における意味上の不透明性、意味形成における背景知識の欠如、など多様な要因が存在しているようである。そのため、こうした個々のNV型複合名詞の習得上の多様な特性を考慮して、中国人日本語学習者に提示されるべきであろう。

注

- 1) クロンバックの信頼度係数とは、ある概念を測定するテストの測定精度を表す指標である。複数の質問項目によって構成されるテスト項目間の内的整合性を調べることで指標化している。項目の測定誤差が小さいほど信頼度係数が大きくなる。
- 2) ピアソンの積率相関係数とは、2変数間にどの程度の直線的な関係があるかを示す数値である。この分析は、間隔尺度および比率尺度のデータについて使用できる。
- 3) 分散分析とは、質的な独立変数に応じて、従属変数の平均がどのように変わるかを検討する手法である。ある独立変数が、従属変数に対して影響を与えることを主効果という。本研究の場合、語彙知識テストで分けた上位・中位・下位の3つのグループが一つの独立変数である。この変数が、4タイプの複合名詞の得点にどのように影響するかを検討するために分散分析を使用した。
- 4) シェフェの多重比較とは、分散分析で独立変数の主効果が有意になった場合に、3つ以上のグループ間の違いを検討するための方法の一つである。本研究では、語彙知識の主効果が有意であったので、上位・中位・下位の3つのグループの違いを検討するために、上位と中位、上位と下位、中位と下位の3回比較をした。

参考文献

- 石井正彦 (2007) 「複合語の形成と「意味表示の二重性」—複合語形成論における「くみあわせ性」と「ひとまとまり性」」『月刊言語』36(18)、50-58
- 沖久雄 (1983) 「複合名詞の意味と構文」『日本語学』2(12)、47-56
- 奥津敬一郎 (1975) 「複合名詞の生成文法」『国語学』(101)、48-33
- 大友賢二 (監修)・中村洋一 (著) (2002) 『テストで言語能力は測れるか—言語テストデータ分析入門』桐原書店
- 国際交流基金 (2013) 『海外の日本語教育の現状—2012 年度日本語教育機関調査より』くろしお出版
- 国際交流基金・日本国際教育協会 (2002) 『日本語能力試験出題基準 (改訂版)』凡人社
- 国立国語研究所 (1987) 『(日本語教育指導参考書 13) 語彙の研究と教育 (下)』大蔵省印刷局
- 佐尾ちとせ (2001) 「複合語の語義記述に関する管見—その 1 「名詞+動詞」型の複合名詞」『同志社大学留学生別科紀要』(1)、63-75
- スバンディ (2002) 「複合名詞の構造モデル—VN/NV タイプの外心複合名詞の意味と構造分析について」『名古屋大学言語学論集』(18)、1-21
- 瀬田幸人 (2006) 「動詞に由来する名詞を含む複合名詞について」『岡山大学教育学部研究集録』(133)、13-24
- 玉村文郎 (1988) 「複合語の意味」『日本語学』(5)、23-32
- 宮岡弥生・玉岡賀津雄・酒井弘 (2011) 「日本語語彙テストの開発と信頼性—中国語を母語とする日本語学習者のデータによるテスト評価」『広島経済大学研究論集』34(1)、1-18
- 宮岡弥生・玉岡賀津雄・酒井弘 (2014) 「日本語の文法能力テストの開発と信頼性—日本語学習者のデータによるテスト評価」『広島経済大学研究論集』36(4)、33-46
- 早川杏子・玉岡賀津雄 (2015) 「改訂版・構造分類による日本語文法知識テストの開発—中国人日本語学習者のデータによるテスト評価—」『ことばの科学』29、5-24

**English Title : The understanding of noun-verb compound
words by native Chinese speakers learning Japanese**

ZHANG, Jingyi (Nagoya University)

TAMAOKA, KATSUO (Nagoya University)

Summary

Previous studies have broadly focused on the Japanese lexical and grammatical knowledge of native Mandarin Chinese speakers learning Japanese. However, only few studies have investigated the relationship of lexical and grammatical understating with the comprehension of Japanese noun-verb compound words. As such, the present study aims to address this issue by administering a Japanese lexical knowledge test (e.g., noun, verb, adjective, and function words), grammatical knowledge test (e.g., morphological inflections, local independency, complex structure), and a comprehension test for noun-verb compound words which are consisted of four types (i.e., subject-verb, object-verb, complement-verb, and no relationship between syntax and semantics). These tests were administered to 143 native Chinese speakers learning Japanese. The overall results of the study revealed that Japanese lexical knowledge was the chief predictor for the comprehension of noun-verb compound words, and that grammatical knowledge had no effect. Further analysis revealed that after dividing the participants into three groups (low, middle, and high) from the lexical knowledge test, two learning patterns emerged. While (i) the understanding of subject-verb and no relationship compound words improved with lexical knowledge (i.e., low<middle<high), (ii) the comprehension of object-verb and complement-verb compound words was only obtainable by learners with high lexical knowledge. Consequently, depending on the type of noun-verb compound word, low and middle level learners may not show improvement in comprehension until they have a high lexical understanding of Japanese. In conclusion, the present study illustrates that the influence of lexical knowledge onto the comprehension of Japanese noun-verb compound words by native Chinese speakers.

Key words : noun-verb compound words, Japanese lexical knowledge, Japanese grammatical knowledge, native Chinese speakers learning Japanese